

東京・わっかない会100回

100回目の「わっかない会」が今月、東京都内で開かれた。稚内出身者の古里会ではない。首都圏の経済人らが数ヶ月に1度、酒を酌み交わして近況を語り合い、親交を深める交流会だ。

たかが飲み会、されど飲み会。「あったかい集い」「もうひとつの古里を思う場所」と会員たちは話す。

（編集委員 関口裕士）



100回目のわっかない会で乾杯する会員たち。後列右から2人目が真柄副会長、同3人目が杉山会長
＝7日（富田茂樹撮影）

「久しぶりに皆さんに会えて、うれしい。プラボー」。7日夜に御徒町の居酒屋で開いた第100回の冒頭、会長の杉山和彦さん（75）は感慨深げにあいさつした。新型コロナウイルス禍で3年近く、99回のまま足踏みしていた。この日は32人が集まつた。副会長の真柄秀明さん（68）は「新しいことに挑戦し続けよう」と乾杯の音頭を取った。

杉山さんは宗谷管内枝幸（西新橋）にいる北海道料理店「わっかない亭」の店主。元社長で2016年には道内出身者の交流会「なまらいいんない会」も立ち上げた。

わっかない会は、かつて

出身者の集まりではないけれど…

店「わっかない亭」の道内と九州の常連客が20年以上前に始めた。現在の会員は60～70歳代を中心に約300人。

もともと稚内出身者は1人もいなかつたが、11年に開いた50回目の記事が北海道新聞に掲載された後、「本家の」東京稚内会とも交流ができる、稚内出身者も5人がわざわざ駆けつけた。

東京都市大名誉教授の徳田正満さん（78）は高校時代を稚内で過ごした。「古里への思いは強い。わっかない会という名前で皆さんのが集まってくれるのが最高にうれしい」と話した。

会員は（元）経済人だけではなく弁護士や公認会計士、画家や書道家、落語家など多才な人々だ。IT会社社長の菅原路子さん（53）は「岩手県出身」は「いろんな世代の先輩のアドバイスをもらえて視野が広がる」と会の魅力を話す。不動産会社社長の船山敬太さん（41）は「神奈川県出身」は24歳の時、當業先で出会った会員に「人脈を広げたいなら今夜のわっかない会で金貢に名刺を配ればいい」と誘われた。7日の第100回夜、参加者全員の近況報告で最後に順番が回った船さんは言った。「わっかない会は人生の学校です」

料理店が縁 経済人ら「人生の学校」